

氏 名	岡田 朋子
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 7604 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	北インド・ブンドルカンド地方における家族と異ジャーティ結婚の 人類学的研究

主 査	筑波大学 教 授	Ph. D.	内山田 康
副 査	筑波大学 助 教	博士（学術）	木村 周平
副 査	筑波大学 助 教	博士（国際政治経済学）	根本 達
副 査	大阪大学 准教授	博士（学術）	常田 夕美子

論 文 の 要 旨

本論文は、経済自由化以後の北インドにおいて社会上昇を目指す後進カーストに属する低中産階級のある家族が経験した複数の婚姻の過程とその戦略に着目して、つながりの潜在性が婚姻の出来事においてどのように現れ、それがどのようにしてつながりを拡張し、あるいは収縮するのかを記述して、現代インドの家族のつながりの潜在性の開放的な側面を明らかにしようとするものである。より具体的には、ある家族で数年間の間に起きた異ジャーティ婚と同ジャーティ婚の記述と分析を通して、世代間で異なる婚姻のつながりの可能性と、サマージ（地域社会）による婚姻の規制との間の葛藤とネゴシエーションを丹念に記述しつつ、従来あまり問題とされなかった家族の流動性と括りの関係を相互交渉的に捉え直すものである。

本論文は 2008 年から 2014 年にかけて北インドのブンドルカンド地方においてヒンドゥー語を用いて行った 24 ヶ月のフィールドワークを通して収集したある家族に起こった二つの婚姻の出来事とそれを取り巻く婚姻に関する詳細なデータを基に記述されている。本論文は序論と結論を含めた 6 章から構成されている。

序論「人の種類」とつながり」では、インド人類学におけるジャーティ研究、婚姻研究、そして異ジャーティ婚を巡る論考を、つながりの潜在性の観点から検討する。先行研究において異ジャーティ婚はジャーティの枠組みの中で周辺的に、あるいは例外として扱われる傾向があった。異ジャーティ婚が中心テーマとなる場合は、それは近代化と都市化のコンテキストにおける個人の選択の問題として扱われ、異ジャーティ婚を巡る様々な当事者たちの前提を異にする多様な葛藤には光が当てられて来なかった。著者は、異ジャーティ婚の出来事とこれが引き起こしたつながりの収縮と回復を数年かけて追跡して、これに関わる人々の葛藤を記述することを通して、現代インドの低中産階級の家族が抱えるつながりの潜在性とジャーティを前提としたサマージによる括りのインタラクティブな過程を捉えることができると主張する。

第 2 章「社会上昇を願う人々-調査地について」では、まずブンドルカンド地方について概観し、その後進性について述べる。続いて 1991 年から始まったインドの経済自由化の進展とその影響を現地の人々の具体的

な経験に関係づけながら論じる。その上で、本論文で用いる家族の枠組みに沿って、現代インドにおいて人々がより良い生活を求めて移住や世帯の分離を厭わないこと、また家族の成員が社会上昇を目指して経済資本と文化資本を増加させるために、互いの資本を利用し合う戦略的な状況を記述する。

第3章「差異とつながり-結婚に向けての努力と希望の事例から」では、より良い生活を求めて人々がどのようにして婚姻相手を探しているのかについて、その過程を詳細に記述している。そこでは、婚姻相手の条件として学歴を重視する近年の傾向や、より条件の良い婚姻相手を紹介してくれる人々と関係を作る努力、また娘と息子の双方にかける愛情のあり方に関わる事例を提示し、婚姻相手探し、ジャーティを初めとする婚姻規範に基づいて行われるのと同時に、現代的なコンテキストにおける経済資本や消費能力の高さとライフスタイルの類似性が重要な条件となっていることが示される。より良い婚姻相手を得るために、つながりの潜在性を実現する試みが不断になされ、婚姻を巡る戦略が現代インドにおける社会上昇の試みと密接に結びついていることが論じられる。

第4章「戦略・サマージ・愛情-異ジャーティ婚と浄化儀礼の事例から」では、家族の反対を押し切って行われた異ジャーティ婚の出来事の展開とそれが引き起こした問題が詳細に記述される。この異ジャーティ婚の出来事の展開を長期間にわたって追跡して、それが家族の成員の間と家族とサマージの間に引き起こした様々な問題を詳細に記述することを通して、この異ジャーティ婚が愛情だけでなく社会上昇するための戦略に基づいてなされたこと、また婚姻規範の違反によるサマージからの制裁にも関わらず、家族もまた愛情と戦略に基づいて葛藤を抱えたまま当該男女と関わり続けたことが明らかにされる。次いで、この異ジャーティ婚によってサマージの制裁を受けて、つながりの潜在性が大幅に縮小した当該家族が、浄化儀礼を行うことによって低下した地位の回復と縮小したつながりの潜在性を再び拡大させる過程が詳細に記述される。この章で特筆されるべきことは、ジャーティの規範を逸脱した異ジャーティ婚が、儀礼を通して、たとえ部分的にではあったとしても、正常な結婚へと転換され得ることを示した点である。

第5章「儀礼と家族の形成-同ジャーティ婚の事例から」では、長男の異ジャーティ婚のためにサマージの制裁をうけて、つながりの潜在性が収縮していた家族が浄化儀礼を行い、つながりの潜在性を高めた後に実現した次男の同ジャーティ婚の過程が記述される。この同ジャーティ婚は、浄化儀礼を行い、地位を回復させ、つながりの潜在性を拡大させた当該家族が、条件の良い婚姻相手を見つけることができるのかというテストケースである。家族は結婚の交渉において望んでいたような良い条件を引き出すことはできないが、この同ジャーティ婚を行うことによって家族の地位の回復は明らかなものとなる。しかし異ジャーティ婚をした長男とその妻は婚姻儀礼には参加しない。良い条件を引き出すことはできなかったものの、つながりの潜在性が拡大したことを示すことに成功した次男の同ジャーティ婚の成立と、異ジャーティ婚をした長男夫婦の困難で周縁的な立場の対比を通して、家族のつながりの強い部分と弱い部分、立場の違いによって異なる家族の境界が示される。

結論「姿をあらわす家族」では、一つの家族の中で起きた長男の異ジャーティ婚、つながりの潜在性の収縮、浄化儀礼による地位の回復、次男の同ジャーティ婚、それ以外の子供たちが望む婚姻のあり方、家族の境界の変容の過程を辿ることを通して何が明らかになったのかを論ずる。家族と家族を構成する成員が持つつながりの潜在性は、ジャーティの規範とサマージの制裁によって制約を受けるが、このつながりの潜在性は異ジャーティ婚の可能性をも含んでいる。先行研究においては、異ジャーティ婚は例外的にあつかわれるか、都市化と近代化のコンテキストで語られてきたが、本論文においては、異ジャーティ婚が社会上昇の手段として選択肢の一つとなりうることが示された。また、現代インドにおいて婚姻はジャーティの枠組みのみでは捉えきれないこと、また家族の境界は婚姻の過程において大きく揺れ動くことが示された。

審 査 の 要 旨

1 批評

インド人類学で婚姻をあつかう研究において、異ジャーティ婚はジャーティの枠組みにおいて例外としてあつかわれてきた。異ジャーティ婚が中心問題としてあつかわれる場合は、都市化と近代化のコンテクストにおけるロマンチックラブの事例として取り上げられる傾向があった。本論文は、異ジャーティ婚をロマンチックラブの問題としてだけでなく、これが現代インド低中産階級の若者にとって社会上昇の手段でもあること、そして異ジャーティ婚がつながりの潜在性の中で現実的な選択肢の一つであり得ることを示した点に特徴がある。本論文の舞台となったブンデルカンド地方の二つの村は、後進的な地方にあり、ジャーティの婚姻規範とサマージによる規制は強く働いている。よって著者が長期にわたって参与観察を行った家族は、異ジャーティ婚を行い、その結果制裁を受ける。当該家族は浄化儀礼を行い、収縮したつながりの潜在性を再び拡張し、同ジャーティ婚を行って後に続く婚姻のつながりの可能性を確保する。その一方で異ジャーティ婚の婚姻は家族の中に葛藤を生み続けている。著者は多様な婚姻の可能性を持ったある家族の境界の変容、その潜在的な開放性と社会的な制裁による開放性の制約について豊かな民族誌を書くことに成功している。著者は婚姻を巡る可能性と出来事と制裁についての豊かな記述をする一方で、分析概念の使い方が厳密でないという問題は指摘されねばならない。しかし、一つの家族を5年以上追跡して、婚姻によって変わるその境界を丹念に描いた本論文は民族誌として高い価値を有すると認められる。

2 最終試験

平成28年1月15日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。